
青スギル糸。。

アサバユウヤ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青スギル糸。。

【Nコード】

N3549A

【作者名】

アサバユウヤ。

【あらすじ】

海が好き。でも、ムリヤリやらされたピアノが大嫌いだった。そんな中二の夏。そんな彼の目の前に突如と現れる初めての出会い。そして・・・失い。沢山の感情が流れる青春時代。――・・・これはそんな青春真っ盛りの筈の二人を描いたオハナシ。

無題

さあ 終わらない話をしよう

君が眠りにつくまで

君が眠くなるまで

これは、

不器用で、

麗しく、

悲しくもあり、

そして・・・愛らしい・・・

まだ子供・・・でも大人だと言い張る・・・

――・・・そんな青春真っ盛りの筈の、二人のオハナシ。。

無題（後書き）

アトガキ。

どうも初めまして。

「アサバユウヤ。」です。

この度は私の小説に目を通してくださって真にありがとうございます。
しました。

この私の作品に目を通したにあたって、何か一つでも多くの感情が
生まれてくださると嬉しいです。

ありがとうございました。

お暇な方はメッセージ等下さるととても嬉しいです、宜しくお願
いいたします^^

1 海

ザアアーーーーンーーーー・・・・・。

海の波のオトがやけに耳に響く。

午後一時半。

真っ青な空。白い雲が一つ、二つ、三つ・・・・・

そして真っ青なウミ。

よく・・だかは知らないけど、小さい子達が『海と空ではどっちの方が青いか。』とか言って話し合ってるのを見かける事がある。

別にどーでも良いけど俺は空だと思うなー・・・

そんな事を考えながら海の方へと自転車をこぐ。

ペースを上げたりゆるめたり・・。それにしても暑い。

まあ夏だから仕様が無いことだが、でも、これはもう、暑いって問題じゃないだろう・・。

キコキコキコ・・・・・

本当に暑いとか言い様のない暑さ。

そんな真夏の暑さの中を自転車のペースを速め、ゆるめ、こぎながら約二十分。

やっと目的地に着いた。

「や、やつと・・・ついたぁー・・・ッ。」

とか言っすばやく自転車から飛び降りて走り出す。

「あ。自転車・・・。」

とか思っすも結局そのまま倒しっ放し。

誰もいない砂浜の上を思いっきり走る。

いようしっ！じゅんびたいそーしゅーりょー！

只がむしやらに突っ走っただけの「じゅんびたいそー」と思えない行動を「準備体操」とムリヤリ思いこんだ。

そして青い、淡い水の方へと近づく。そこで・

「あ。」

ようやく自分が身に着けている衣類の格好に気づいた。

半袖のYシャツと黒いスーツの様なズボンの制服・・・。

もしここに自分以外の誰かが居たとしたら必ずこう思うだろう。

――・・・ああ、こいつ学校をサボったんだな・・・、と。

そう、学校をサボった。しかも、中学校。

まだ早いと思ったが・・・大丈夫だろう。

成績だって特に悪くない、むしろ良い方だ。授業中だって居眠りした事無いし、提出物だってちゃんとあげている！ココはちよつと自慢。

そしてそして何といっても・・・。「せーとかいやくいん」。

そう、「せーとかいやくいん」。

これでも結構真面目君な俺。

だから、いきなり「朝から頭痛が酷かったので・・・早退します」・・・とか何とか言っす時は誰も疑う人なんて居なかった。

サボった理由・・・そんなものは特に無い。

ちょっとやってみたかった好奇心とココへ来たかっただけ。

そんなこんなでもうどうしようも無かったから豪快に制服の裾をまくり上げた。

「……結局制服で海に入ろうとするし、自転車はそのままだし、
「じゅんぴたいそー」もろくにやらないし……もうぐちゃぐちゃだ。

だが、もう過ぎてしまった事。

そうして彼は、青く淡く漂うモノの上に大の字で仰向けに倒れこんだ。

バsshアアーンツツ……。

——ふう……たまにはこんなのも良いかもな。

そうして手を空にかざしてみる。

すぐ手の側にある雲がつかめそう。……でもつかめない。分かっているけど……。

そうしているとさっきまでジリジリと自分の皮膚を焼きつけていた太陽の日が何だか穏やかになってきた様な気がする。

すごく心地よくなって目をつむった。

「スー……。……。……。ハ……。」

大きく息をすってゆっくりとはきだす。

……何だか眠くなってきた。

寝るのは、好きだ。

というか夢を見る事、か？

非現実的な事があるののまま普通に受け止められる。

何だか、面白い。

ああ、もういつそのまま眠っていたい。

そーすりゃもう起きなくて済むし、あんなのも弾かなくて済むんだあー・・・。

どんだん気が遠くなってくる。

あ。

そういえば俺の名前って・・・なんだっけ？

こう、心地よくなると何もかも記憶があいまいになってくる。

あ・・・思い出した・・・

サトウ・・・シンヤ。

そ、佐藤深夜

14歳。中2。

誕生日とかは・・・どうでも良いけど。

あ、そうそうフツ―はこの後趣味とか言うんだよな。

趣味・・・まあ特には無いけど・・・ムリヤリやられた、ピアノ』とか？

『

・・・うん。

そーだ。

2 出会い

——・・・もう二時間近くこのままだろうか。

相変わらずここには誰も来ない。

と、いうか来たのにもかかわらず気づかなかったのかもしれない。
なぜかという・・・つい、そう、「つい」眠ってしまった・・・。

そろそろ起きるか・・・。

起き上がろうとしたが本能ではまだここにいたいらしく、しつこく体が動かない。

「ウーーーーー・・・。」

すると、ふいに目の前が真っ暗になった。

・・・雲？雲が太陽にかかったから、ここ一帯が少し暗いのか？？
そんな事を考えてまた、安心感に浸る。

・・・だが・・・妙に変だ。

一向に明るくなる気配が無いし、明るくならない。

あ・・・もしかして・・・い、いやそれはありえない・・・

そんな非現実的な事はううううう受け入れないぞっ！

そんな事を考えてぎゅっと目をつぶった。

すると今度はさっきよりも暗くなった。だんだん焦り始めてくる。

だ、大丈夫だ俺。今までの武勇伝を思い出すのだっ・・・って

何もねえじゃねーか！俺！！

とか何とか思いながら一人で突っ込んでみる。

さっきまで暑くて汗まで出てきていたのが、今度は冷汗まででてきてしまった。

刻々と時間は経っている。

この砂浜にずっと緊張が走っている。

あー……。もう俺、無理かも。頭どうかなっちまう……。

そして、ついに我慢できなくなって目をおさるおさる開けた。

い。い。い。い。いや、現実逃避をしてはいけないと思ったのかもしれない。

「ぬうおおお!? つて、デウエタアアアアー……ッ!!!!」

「きゃっ!」

●
●
●
●
●
●
居た。

この世の物ではない、得体の知れないものが、居た。

深夜はすっけながらも一目散に自転車の方へと走った。

そりやもう走った。死ぬ気で走った。オリンピックで黒人のランナーと同レベルぐらいの速さで走った。

あと一歩で自転車！という所で何か違和感を感じた。

「……あれ？ さっきの何かこの世の物ではない得体の知れないものが「きゃっ！」とか言わなかったか？」

おそろおそろペースをゆるめて後ろを振り返って見る。

すると、そこには「この世の物ではない得体の知れないもの」・・
 なんかではなく、

深夜と同年代くらいの普通に「得体の知れている」女の子だった。

「あ。」

「本っ当にすみませんでした。」

彼女のペースに合わせて自転車をひいてた。

もう何回言ったか分からないお詫び・・・謝罪のコトバ・・・。

しかも咬んだ。咬み咬みだ。

んでもって制服はびっしょびしょ。

それなのに彼女はプツと吹き出して笑った。

「あつはは！おもしろいなあ。あ、そういえばまだ名前言ってなかったし聞いてないよね、

私は渡邊優姫わたなべゆうきっ。」

「あー・・・そだそだ。俺はー・・・」

「・・・俺は？」

「・・・何だっけ。」

「プツ・・・アハハハハ！！」

マジボケした。彼女、優姫と言う子はまた笑い出した。

よく笑う子だなあー・・・。

とか考えながら横目で彼女を見やる。優姫はお腹を抱えて苦しそうに笑っている。

あ・・・。

よく見れば結構肌は白く、髪は肩よりも長い。ぱっちりした瞳、少し垂れ目だけど。

すごく整った顔立ちだ。

・・・何ていうんだろう・・・「ビジン」？

あー・・・そんな感じだ。よくクラスの男共が言ってるやつ、

「ビジン」とか「カワイイ」とか。俺は興味ないからよく分からないけど。

ともかく一言でいうと・・・その「ビジン」と言うやつだった。
ん・・・？あり？

まじまじと良く見ると気になることが浮かんた。

何で彼女は、制服なのだろう？

そして・・・何処かで見た事があるような気がする・・・
すると、

「で？何で深夜はあんなとこに居たの？」

ようやく笑いが止まったが目には涙を浮かべている。

「え・・・名前。」

優姫は次の言葉を悟ったのか彼の胸を指差した。

・・・ああ、名札。

彼の納得した顔をみて優姫がにっこりと笑った。すごく綺麗に笑っていた。

だが、その時俺は「何で笑ってるんだ？」としか思っていなかった。
こんなに綺麗に笑っているのに・・・。

「あ、ところで優姫・・・渡邊さん？は何故に制服であんなとこにいたのでしょーか？」

少し固まりながら言っていた。

「え？あ、優姫でいいからね。あとその質問、先に私が言ったんだけどね・・・まあ良いけど。」

「・・・制服なのは・・・サボっちゃった・・・からかな？」

「へえー・・・。」「あ、でも初めてだよ？これが初めてだからね！？」

意外だなーとか思ってる深夜に必死に訴えてくる彼女。何だか笑えた。

「あ、何で笑ってるの？」

・・・また笑える。優姫は顔が真っ赤っかだ。

「あー・・・ごめんさい、なさい。まあ・・・うん、俺もサボっちゃったーみたいなのだから。」

あ。自分の事喋るなんて・・・いつも適当に答えているのに・・・
しかも初対面の人。

あんまり人に自分の事を喋らないので反射的に自分の口に手を押さ

えてしまった。

でも、あまり彼女は気にしていない様子だった。

「?どうかした?・・あ、っていうかさ、サボっちゃったんだよね
仲間だよ!仲間!」

「あ、でも初めてだよ?これが初めてだからね!」

つい彼女の口調をマネして言ってしまった。優姫は「何それ!・・」
とか言って一瞬顔を強張らせたが、すぐにゆるめてまた笑い出した。
大げさなくらい笑っていたが、全然うるさく感じなかった。

——佐藤 サトウシンヤ 深夜。未だに初恋の「は」の字も知らない十四歳。中
二。

趣味は・・特には無いけど無理やりやられたピアノって事で。

——渡邊 ワタナベユウキ 優姫。一応初恋は知っている十四歳。中二。趣味は・・
同じくピアノ。

え・・・

ピアノ?あ、もしかして・・・

――・・・そう。これが僕らの出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3549a/>

青スギル糸。。

2010年10月28日03時23分発行